１０　保護者との連携

保護者への理解の促進を図るとともに、保護者と連携して支援する体制づくりが求められます。保護者に対し、自校における特別な教育的支援を必要とする幼児児童生徒への対応方針等を説明し、理解を得ることは大切です。多くの場合、校内コーディネーターが保護者との連絡調整の窓口となる役割を担うことになりますが、校長のリーダシップのもとに、校内体制づくりを進めるとともに、保護者の理解の促進を図ることが重要となります。

学級担任は、児童生徒の支援を考えるとき、学校での指導に注目してしまい、時には、家庭での状況や生育歴を考慮することを忘れてしまうこともあります。しかし、支援を必要としている児童生徒が、一日の半分の時間を家庭で過ごし、また、多くの時間を一緒に過ごしているのは保護者ですから、児童生徒の支援に当たって、保護者との協力関係を形成することはとても大切です。

例えば、保護者と担任が一緒に児童生徒への接し方や支援の方法を考えることで、保護者との共通認識のもとで支援を進めることができるようになります。保護者との協力関係が得られなければ、検討した支援が児童生徒の生活の充実や今後の成長に結び付かなくなる可能性もあります。

担任の思いや考えが先行し、保護者の思いや願いを受けとめることができない状況になることがあります。そのようなときには、校内コーディネーターは、児童生徒の状況や対応方法について、保護者と情報交換するとともに、協力関係が築けない理由を考えてみる必要があります。

例えば、保護者自身が、児童生徒の困難さを認めることができず、担任の考え方を理解することができないのかもしれません。また、保護者は理解していても祖父母など親族との関係で受け止めることができないでいるのかもしれません。

校内コーディネーターは、保護者の考え方や希望を理解し、よりよい指導・支援が行えるよう、担任と保護者間の連絡・調整することも必要となります。

（事例）ありがちな懇談失敗例

・学校として取り組むべき課題を保護者に委ね、トラブルになるケース。

＜トラブルの要因＞

・家庭訪問や参観日以外で保護者と懇談することが、突然、生じたことにより、必要以上に緊張してしまう。
・学校と家庭での様子が違い、担任と保護者の状況の把握が違う。
・学校という環境において、その子どもの困難が顕著になることがある。

【資料編】保護者との連携を深めるためのポイント

＜保護者と連携するときの前提＞

○　保護者は、学校での課題を解決できない。 ○　教員は、家庭の課題を解決できない。 ○　教員は、学校での課題を解決する。 ○　保護者は、家庭の課題を解決する。

＜保護者と懇談するときのポイント＞

1　今、解決したい課題がある（最優先課題を抽出）。 2　解決に向けての支援プランを作成する。 3　支援プランを実行する上で、保護者に協力してほしい内容を明確に提示する。 4　本人を中心に考える（全て子ども本人に必要なことである）。 5　支援プランを実行すると得られるメリットを明確にする。 6　案が採用されないときの代案を用意しておく。 ※　保護者への苦情申し立てにならないように、支援プランについて保護者に理解を求めるという姿勢で懇談する。

＜子どもの課題に理解が得られないときのポイント＞

保護者の心情等	連携のための方策
・保護者が全く、気付いていない。 ・分かっていても認めたくない。	○　子ども本人の「困っている点」を切り口にする。 ○　支援プランの用意をしておく。 ○　保護者の努力を認める。 ○　定期的に話し合う機会を確保する。

＜懇談における基本姿勢＞

1　「A君が、困っている。」（事実や経緯の確認）
　「学校でこんなことが起きていますが、一番困っているのは、A君自身です。」
2　「こういう理由からこんなことが起きていると思われます。A君が困らない方法を考えたいのです。」（特性理解）
3　「今すぐにできることは、これです。」（プランの提示）
　「A君のために、こんなことをしてみようと考えています。」
4　「こうすることで、A君のこういう点が成長できると思います。」（メリットの説明）
5　「保護者の方の御意見も伺いながら進めて行きたいと考えています。いかがでしょうか？」（連携の要請）

＜チームでの保護者との懇談＞

・学校が組織として子どもを支えているという姿勢を示す。
・担任の他に、校内コーディネーターや学校全体の事情を把握している教務主任などが加わる。
・チームで対応すると担任が替わっても、引継ぎができる。
（同じことの繰り返しを避けられる。）
・ただし、人数が多くなりすぎて保護者が圧迫感を感じないように配慮する。
・必要に応じて、第三者の専門家と連携する。
（児童生徒を具体的にどう支援していくのかという視点で保護者と教員が第三者を前に、同じ立場に立つ。）

＜保護者との懇談は、目的を明確にしてから＞

・保護者の思いや考えを受け止めることから始める。
・子どもを理解してもらうための「大切な話」であることを伝える。
・保護者が希望をもって子育てできるように学校として支援することを伝える。
・専門家につなぐための第一歩にする。
以上のような目的を校内委員会で共通理解してから懇談に臨む。

＜医療機関等の専門家につなぐときのポイント＞

・子どもの問題を解決することに対して前向きになれるように、事前にしっかりと保護者を支えておく必要がある。
・具体的に専門家の機能や保護者や本人にとって専門家につなぐメリットを説明する。
・支援のために、まずは学校が連携する。
　「〇〇病院の□□ドクターに学校での支援方法について、相談してもよいですか。」
・具体的な見通しのない提案は、保護者を不安にさせるだけである。
　「一度、医療機関を受診してみてください。」×
　「一度、検査をしてみたらどうでしょうか。」×
・担任が困っている状況だけを取り上げて、専門家を紹介すると、不信感につながることが多い。
・学校での支援には、診断を必要としないものもある。

＜学校や担任が熱心な保護者の願いに応えきれないとき＞

・説明は、最小限にする。 ・日頃から担任や校内コーディネーター等が専門性を身に付ける。 ・「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」などを共同で作る。

＜保護者が傷つくことば＞

「学校では、そういうことはできません。」（はじめから「できない」と言わない。） 「学校がどんなところか分かっていませんね。」（保護者の無理解を責めている。） 「ちょっと、困っています。」（あなたの子どもがいて迷惑していますと受け取られかねない。） 「私は、専門的なことはよく分からないので。」（私には関係がありませんと言っているのと同じ。） 「他のお子さんもいますので。」（言われなくてもわかっている。） 「忙しくて」（来る人を拒み、傷つけることがある。言い訳に聞こえる。）

＜問題解決に近づくための効果的な一言に＞

「御家庭で、お子さんとよく話してください。」	「解決方法をＡさんと一緒に考えたいのですが、Ｂ君は御家庭では、どのように過ごしていますか？」 ・学校での課題を保護者は解決できない。 ・家庭で言って聞かせるだけでは、解決しないことが多い。 ・家庭の様子を確認して、家庭でできることを一緒に探す。
「愛情が不足しているのではないですか。」	「今日まで頑張って育ててこられたのですよね。」 ・単に責めても問題解決しないばかりか、関係をこじらせてしまう。子育ての苦労をねぎらうことから。
「将来のことを考えたら、とても心配です。」	「今回、乗り越えれば、力がつくと思います。」 「次回は、もっと上手に乗り越えられます。」 ・「心配」という言葉は、親の不安を増長させる。
「そこまで責任がもてません。」	「この部分については、責任をもって対応します。こういう点については、Ａさんにも応援していただきたいので、一緒によい方法を考えていきましょう。」 ・できること、できないことを明確にしていきながら、承諾してもらえるように提案する。
「親御さんの考えすぎですよ。」 ＜状況＞ 担任：課題認識してない 保護者：課題認識している	「Ａさんが、どれだけお子さんのことを大切に考えておられるかが分かります。親であれば、心配されるのは当然です。Ｂ君は、学校では、こんな風に頑張っていますので、大きな課題として捉えていませんでしたが、Ａさんとお話しして、実は、Ｂ君が学校でとても頑張っていたということが、今日、よくわかりました。」
「お子さんにだけ特別なことはできません。」	「今のところは、そういう点には、取り組めていませんが、Ａ君の支援は、現在、こういうことに取り組んでいます。御希望があれば、ぜひ、お聞かせください。」

「学校には学校の方針があります。」	「学校の方針は、こういう理由から考え出されたことです。お子さんを大事にしたいということは、親御さんの思いと一緒だと思います。親御さんの思いもぜひ、教えてください。きっと、共通することがあるはずです。」
「お宅のお子さんにも原因があります。」	「どの子にも、まだ、自分だけで克服できない困難があります。A君にも困難があって、他の子どもにも、A君の困難を『認めることができない』という困難があります。クラスでは、『誰でもそれぞれ困難があり、なかなか大人のようには、お互いを理解したり、問題を解決したりできないこともある。』ということを伝えながら、子どもたち自身にも考えてもらう機会を作ろうと考えています。」

＜保護者から言われて、担任が困ってしまうことば＞

「先生はうちの子に障害があると言われるんですか？」	「大切なことは、私たちがお子さんの困難を受け止め、教育環境を整備することだと考えています。」 「お子さんは、こんなことが得意です。こういったやり方をするととても意欲的に取り組まれます。だからこそ、こういう長所を伸ばす教育環境を整えたいのです。」
「先生、何とかしてください。」「何とかならないんですか？」	「はい。私が見たA君のよいところは、こういうことです。そして、学校で困難だと思われることは、こういうことです。それによって、他の子どもたちとの間で、こういうことが起きています。その中で、早急に解決する必要があるのは、この点についてです。解決する方法としてこういうことを考えてみました。親御さんのお考えをお聞かせいただいた上で、一つずつ実行しようと思うのですがいかがでしょうか？」

＜子どもを傷付けることば＞

・みんな、〇〇さんのお世話をしてあげて（本人の自尊心を傷つける）。
・頑張ってね（これ以上、何を頑張れって言うの？）。
・どうしてわからないの？（それが分かれば苦労しない）
・何度言ったら分かるの？
・昨日も言ったでしょ。
・また同じことをしている。

参考：ＮＰＯ法人　大分特別支援教育室フリーリー（実践セミナー）